口語詩句 2024.1 月　総評　龍　秀美

＜評＞年明けからの大事件のかずかず。「去年今年」という俳句の言葉を強く意識させられました。自然の無頓着な横暴に人間の慣習や意識がどのように働くか。そのことにも興味を持って選考しました。

手の影を生む栞を抜くために

長谷川柊香　宮城県
――栞を引き抜くという何気ない仕草だが、その動きが手のシルエットを生む。それは舞踏のようにも見えるかも知れない。

すいれんの閉じる
に併せ
ねむる祖母の
まぶたに溜まる月光のあお

さいう　愛知県
――花弁は朝開き、夜には閉じる。自然の呼吸のように祖母もまた自然に帰る。それは美しい営みだ。

校正で誤字を見つけた春の日の
桜ざわざわ咲く吉野山

小島　涼我　東京都
――校正という作業はどこまでいっても終わることが無い。その、深山に分け入っていくような感覚と、咲き誇る桜の猥雑なほどの底知れなさが通じる。

間違った話を訂正せずにいる
着衣水泳みたいな生き方

あお　奈良県
――多様性や多極化などといわれる昨今。自分の価値観を強く主張しにくくなっている。その何ともいえない違和感が「着衣水泳」という比喩にぴったり。

戦争の噂で液晶明るくて

杢いう子　佐賀県
――ことさらに明るく鮮やかな液晶画面。そこにどんなものが映ろうと。テクノロジーの非情。

におやかな閃輝暗点去年今年

田崎森太　東京都
――目の中にギザギザが飛ぶ閃輝暗点。難しい病が隠れていることもあるという。去年今年の世界にも。

家ふるえ
足がふるえて
声ふるえ
ふるえる指が
「震」の字をうつ

和泉次郎　新潟県
――五七のリズムの中に漢字自体も組み込まれている。軽やかな日本語の音韻が現実の重さをかえって強調するようだ。

風船の
　紐が離れて
　　親
　　べっ
　　きょ

杉本　太　北海道
――子にとって、自分にはどうしようもない周囲のなりゆきが、すり抜ける風船の動きにまざまざと感じられる。

仕送りの茶封筒
口に糊をして。

羊夏生　東京都

――粥を口にする糊口という、やや古い言葉が、仕送りに含まれる背景まで感じさせる。

大いなる他人事だと水底で
籠のひしゃげた自転車を押す

常田　瑛子　山口県
――暗い水底、無残に壊れた自転車。それを押す者は誰だろう。誰もがそうなるし、そうなるまでは他人事だ。「大いなる」という一言が、繰り返される悲劇を普遍化する。

ぐっと近づきたい音符の傍らで
詩はダンスを抑えてる

五月閉じ花　北海道
――音楽と文学と舞踏の働きがひとつのアートを作り出す。独り、身体ではない詩が、表現のオーバーランを抑制する役目。

目の中に無数の花火の残像を
飼ったまま金魚を覗きこむ

狛犬　吠　岡山県
――金魚は飼うが花火は飼うものではない。しかし残像ならば、イメージの中で膨らませて目の前のものに投影することができる。表現のひとつのかたち。